

全国地震動予測地図の広報資料の試作について

令和7年2月18日

地震調査研究推進本部事務局

昨年度の広報検討部会での議論

昨年度、地震本部の成果物の周知・広報の手法について議論を実施

論点：地震本部の成果物の周知・広報の手法について

資料 広6-(3)
今後の地震本部の広報活動について より抜粋

調査研究の成果を社会に伝え、防災対策の強化につなげることを目標とした、より適切な結果の伝え方・見せ方の検討が必要。

伝え方・見せ方のポイントや留意点の論点例

- **成果を伝える対象を絞り、対象毎にプロダクトやその見せ方を変える**方が良いのではないかと
— 成果を伝える対象の優先順位について
- 内陸で発生する地震は海溝型地震に埋もれがち。**誤解されない伝え方はどのようにすべきか。**
— 地図1枚で伝えるべきか、様々な情報を多面的に伝えるべきか
- 内陸地震（地震活動データのみを用いた全国的な評価）、
海域活断層（位置・形状やそこで発生する地震の規模）の早期公表について
- 地震調査研究推進本部のウェブサイトの改修や、広報専門の民間企業等の能力を活用するべきか

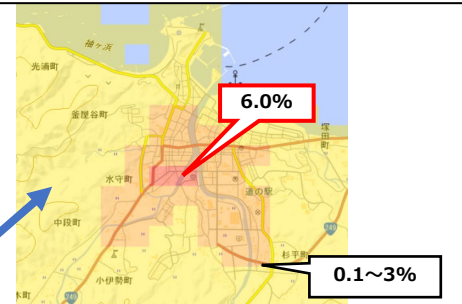
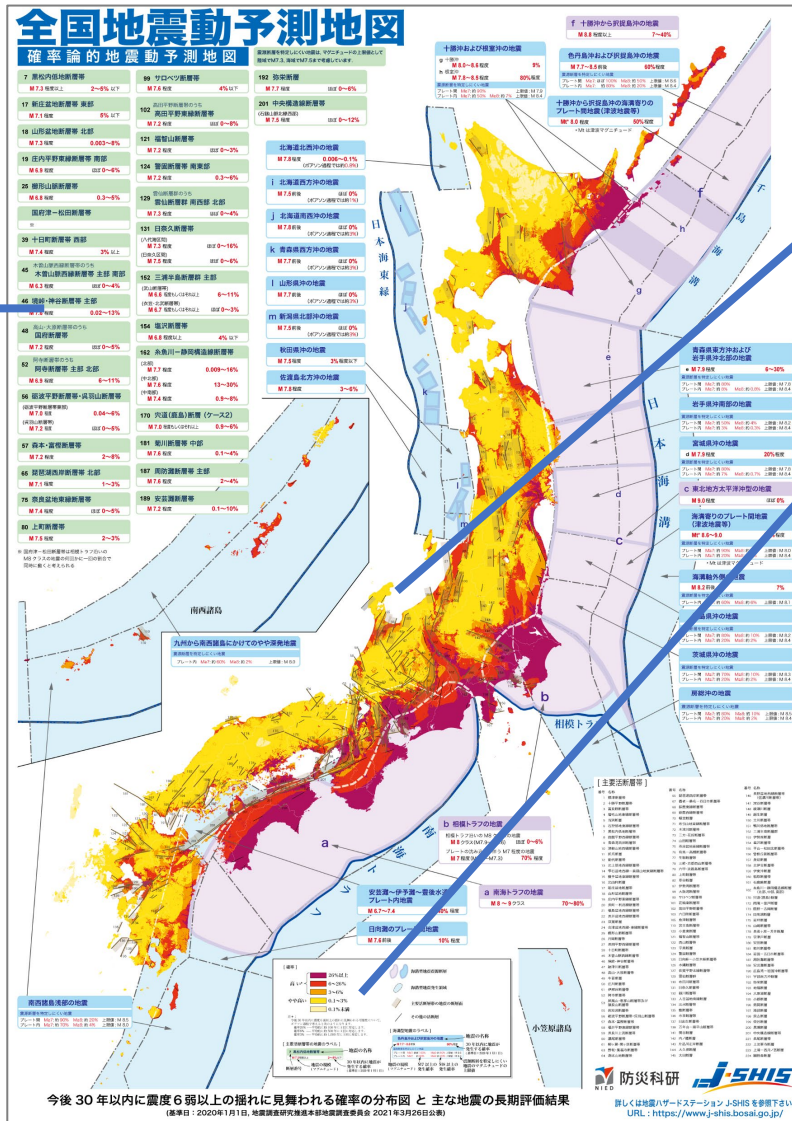
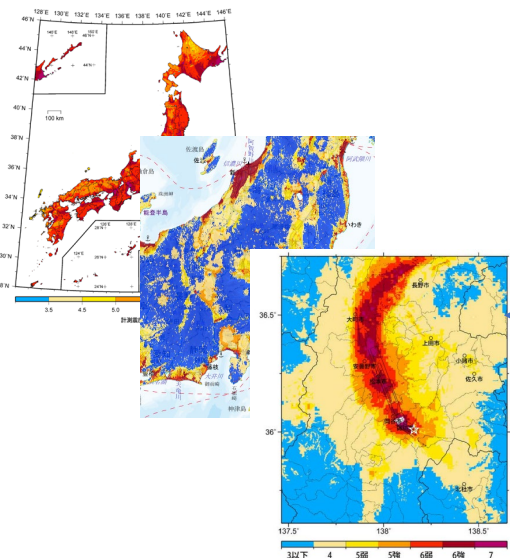
全国地震動予測地図等の見せ方・伝え方の論点例

- これまで全国を1つの地図で表示していたが、**地域別（地域ブロックや、都道府県、市町村等）のデータや地図に容易にアクセスできるようにすべきか。**
- 確率論的地震動予測地図により「全国で地震が起きる」ことについて一定の周知・広報の効果があったが、今後、**長期間平均ハザードや、各活断層の想定地震地図等の情報も周知していく**ことも重要か。
- **中間生成物**（予測地図等の計算に用いるための生データなど）や、**個別の地質情報や評価結果等**（活断層の位置や形状、表層地盤、想定地震地図）なども共有していくべきか、その場合の**プロダクトの提供相手はどのようにすべきか（主に専門家向けとすべきか）**。

※ J-SHIS 地震ハザードステーションで多様な表示が可能だが、より良いUI、UXの提供手法はあり得るか。

全国地震動予測地図 (ポスター) 解説のイメージ (案)

資料_広6-(3)
今後の地震本部の広報活動について より抜粋



○ 広域では判別しにくい**が、局所的に拡大すると、確率値に差がある**ことを例示してはどうか。

確率	色	超過確率	人口
高い*	26%以上	3%以上	1億人 (80%)
やや高い	6~26%	6%以上	9,000万人 (71%)
	3~6%	26%以上	5,400万人 (43%)
	0.1~3%		
	0.1%未満		

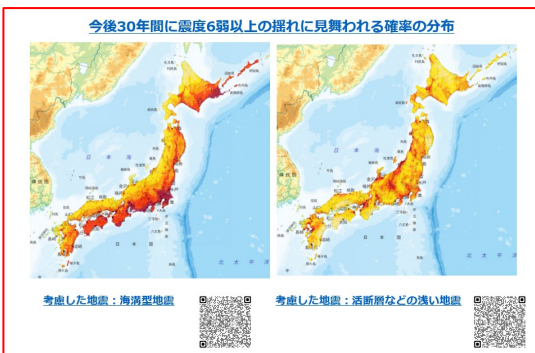
○ 単なる安心情報と誤解されないよう、全国どこでも地震が起きること、日本の人口の8割が30年間で震度6弱以上の揺れに見舞われる確率が3%以上であること等をさらに周知するには、どのような記載が必要か。

・地図上の色は**30年以内に一定以上の揺れに見舞われる確率の違いを表しているもので、色の違いでは安全性の比較はできず、0%でない限り同程度の揺れが起こる可能性がある**こと等を明示すべきか。

・「高い」「やや高い」の表記を再検討すべきか。

・確率値の意味※1やほかの災害・事故等との比較※2等を記載することとしてはどうか。

○ 活断層等での地震発生確率値の記載は省略しつつ、**様々な種類の地図があること (以降、参考情報も参照)**を示してはどうか。



○ J-SHISのサイトへQRコード等で誘導 (J-SHISの各情報は、それぞれリンクを作成可能) してはどうか。

※1 確率値の意味: 「今後30年間に震度〇〇以上の揺れに見舞われる確率」が0.1%、3%、6%、26%であることは、ごく大まかには、それぞれ約30,000年、約1,000年、約500年、約100年に1回程度震度〇〇以上の揺れが起こり得ることを意味する。
 ※2 交通事故で死亡: 0.084%、火災で死傷: 0.18% 等

昨年度の広報検討部会における主な意見

○地震動予測地図のサイエンスとしての意義

- 一つの標準的な考え方の下、一枚の地図にしたことにはサイエンス的に意義がある。

○地震動予測地図の使い方

- 全国と、自分の住んでいるところの両方を見る必要がある。個人にとっては拡大して見るのが重要。

○地震動予測地図についての課題

- 確率の数値がどういう数値なのかということ、一般の人がなかなか理解できない。
- 色を付けたり、数値を入れて優劣をつけると、一般的には優先度や切迫度、又は選択のための資料として使われる。
- 説明文を記載するなどの工夫がないと、誤解され続けてしまう。
- 公表と広報は違う。どのような広報の仕方をすれば良いのか、丁寧に考える必要がある。

○課題に対する対応の方向性

- 誤解されない表示、記載の工夫が必要。
- 地震動予測地図の対象は、一般（それらの方に伝達をするメディアを含む）、自治体等の防災担当者、建物などの設計をする専門家の3つがある。ターゲットごとの広報が必要。その中でも、一般の人に理解いただくことが全体の底上げになる。
- 立場によって見方が違うので、いろいろなバージョンの地震動予測地図を考えていくのは良い。

○広報資料の具体的な内容についての意見

- どのように使ってほしいかということ、事例を見せていく必要がある。
- 「こうなさい」だけでなく、「こうしてはいけない」「こういう意味ではない」ということを一緒に言う必要がある。

○広報に関する全般的な意見

- 地震調査研究について伝える手法やハザード情報の活用され方についての調査研究が必要。

地震動予測地図の広報資料の試作

- 昨年度の広報検討部会での意見を踏まえ、今年度、広報を専門とする民間会社の協力を得ながら、事務局において全国地震動予測地図の広報資料を試作。

(資料_広7-(4)_全国地震動予測地図広報資料試作版)

試作に当たって、特に留意した事項

誤解なく地震動予測地図を使ってもらえるように

- 拡大して見ることができることが伝わるように
- 地震動予測地図に関するよくある誤解・誤用を解説

読みやすいパンフレットに

- 情報を詰め込みすぎない
- イラストを多用して、親しみやすく
- ところどころに専門家の解説コラムをはさみ、納得感が得られるように

対象者を意識したつくり

- 対象者別に活用場面を示す

試作版の各ページの内容

P1 【オモテ表紙】 キャッチーな表紙を意識

キャッチコピーを明示。
最終目的としての、地震に「備える」を意識した文言に。

知ってほしいこととして、「地震動もこと、あなたの住まいのこと」を明示。

虫眼鏡により、拡大して表示ができることを前面に押し出す。

全国地震動予測地図で何が分かるかを明示。

地震に勝たない国にする
地震本部
政府 地震調査研究推進本部
The Headquarters for Earthquake Research Promotion

NIED 国立研究開発法人
防災科学技術研究所
National Research Institute for Earth Science and Disaster Resilience

全国地震動予測地図

活用パンフレット

正しく知って、備えよう。
地震動のこと、
あなたの住まいのこと

東京 震が関の場合

今後30年以内に
震度6弱以上となる確率 49.3%

地震増幅率	1.51
微地形区分	火山灰台地
30m平均S波速度(浅部地盤)	247m/s

0 0.1 1 10 100(m)

250m四方単位のきめ細かさでお住まいのエリアの「揺れやすさ」がわかります。

試作版の各ページの内容

P2~3 【導入】「地震動予測地図」の紹介

地震動予測地図とはどういうものなのか、何のために作っているのか、をはじめに記載。

何の役に立つのか、なぜ地震動を知る必要があるのかを記載。

交通事故や火災と比較し、確率が低いように見えても備える必要があることを記載

「地震動予測地図」の紹介

第二章 地震動予測地図を見てみよう

第三章 地震動を理解し、正しく備えよう

第四章 ご利用の際の

地震動予測地図とは？

地震動予測地図（確率論的地震動予測地図）は、**一定の期間内に ある地点が ある大きさ以上の揺れに見舞われる確率を計算し、その結果を地図に表示したものです。**

→「J-SHIS Map」からウェブサイト上で見ることが出来る「地震動予測地図」では、**任意の地点（250m四方）が、たとえば「今後30年以内に」「震度6弱以上の揺れ」に見舞われる確率を知ることができます。**

Q.なんの役に立つのですか？

備えの前提となる「地震発生時のリスク」をきめ細かく知ることが出来ます。地震はいつ来るかわかりません。地震大国日本に住む私たちは地震の発生から逃れることはできません。だから、やみくもに恐れるのではなく、十分な備えをするという意識をもつことが肝心です。そして、必要な備えをするためには、自分が生活している地域の「地震の揺れのリスク」をまず知る必要があるのです。

Q.大きな揺れに見舞われる確率が低ければ、ひとまず安心と思っていいいですか？

「J-SHIS Map」の地震動予測地図では、30年以内に大きな揺れに見舞われる可能性を $\sim 0.1\%$ $0.1\sim 3\%$ $3\%\sim 6\%$ $6\%\sim 26\%$ $26\%以上$ で色分け表示しています。30年で3%、6%と言われたら「高い確率ではないのでは？」と感ぜられるかもしれませんが、地震動以外の他の物理に見舞われる確率と比較してみましょう。例えば、統計データから計算すると、ある人が30年以内に交通事故で死亡する確率は**0.084%**、全国で完備する確率は**0.012%**です。また、別の例で言うと、火災で罹災する確率は**0.94%**ですが、それでも火災保険に加入している方は多いかと思えます。「いざ、起きたときの被害や影響の大きさ」を考えたとき、**3%というのは決して低い値ではなく、備える必要がある**ということを実感できるのではないのでしょうか。

リスク評価のための定量的比較

高い確率の認識
身近なリスクの比較

地震の可能性
交通事故の可能性

Q.なぜ250m四方ごとに示しているのですか？

揺れの強さは、地下の地盤の状況により大きく変わります。少し場所を動いただけで揺れの強さが全然変わることがあります。そのため、250m四方ごとに地盤のデータを整備し、250mごとの強い揺れがくる可能性を示しています。

たった250m違うだけで**地盤の状況もそれに伴う揺れの大きさも変わります**

地震動予測地図は、過去の地震の履歴のデータと地盤の揺れやすさのデータを基に、将来見舞われる可能性がある地震による揺れの強さを、250m四方ごとに予測し、地図として表したもので、「ある確率で強い揺れがくる可能性がある」ということを示しています。この地図は、地域の防災計画など、さまざまな分野で活用されています。

コラム 地震に遭っても、被害を少なくするために備えるということは交通事故や火災に備えるのと同じことです。

交通事故や火災などいつでも遭遇する可能性がありますが、みなさんは、大きな被害にならないように、日々気を付けておられます。地震も同様です。地震動予測地図では、データに基づいて、強い揺れに見舞われる可能性が確率で示されていますが、重要なのは、「危険性を知りつつもそれに備え、被害を軽減する」ということです。強い揺れに遭遇したとしても、耐震化、家具の固定、迅速な避難などで被害を軽減できます。

地震、交通事故、火災いずれも、**備えをしておくことが重要**です。

なぜ250mメッシュまで拡大して表示することが必要なのかを解説

「交通事故」や「火災」と同じように、「備え」が大事であることを記載。

優しいイラストとともに、地震動に対する**備え**を呼びかける文章を記載。

試作版の各ページの内容

P4~5 【本編】 「地震動予測地図」 を使ってみよう

初めての人がまず使ってもらいたい機能を目立たせる。

上のタブは、初めての人に特に見てほしい確率論的地震動予測地図と表層地盤を目立たせる。

使ってみよう! 地震動予測地図

技術研究所が公開しているウェブサイト(J-SHIS Map)で、地震動予測地図を使ってみよう。自分で住んでいる場所ではどれくらいの地震の揺れがくるのか、調べてみましょう。

ざっと使ってみよう!

J-SHIS 地震ハザードステーション
Japan Science and Technology Education Station
<https://www.j-shis.bosai.go.jp/map/>

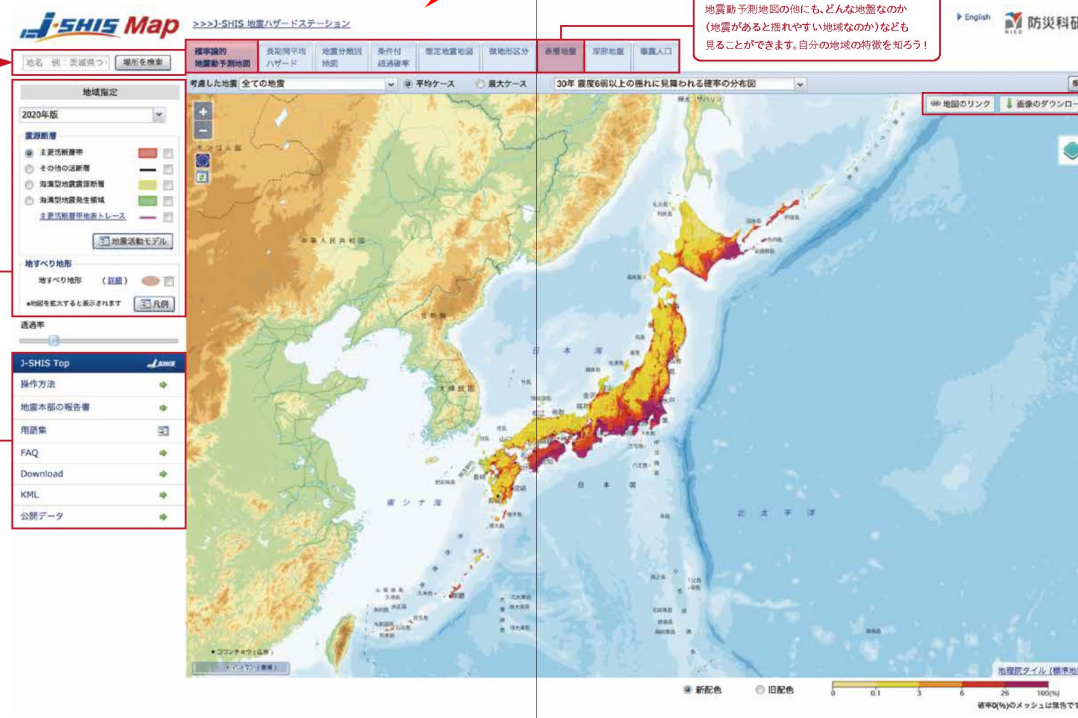


まずはここから自分の住んでいる地域を絞り込んで見てみよう!

活断層はどこにあるかな? 南海トラフ地震の震源域はどこかな? 調べてみましょう!

操作方法から各種データ、よくある質問はここから!

その他は、「こんな機能がある」くらいの説明にとどめる。(あえて情報量を減らす)



地震動予測地図の他にも、どんな地盤なのか(地震があると揺れやすい地域なのか)なども見ることができます。自分の地域の特徴を知ろう!

地図はダウンロードやリンクを作ってシェアできます。防災の資料作りにも

試作版の各ページの内容

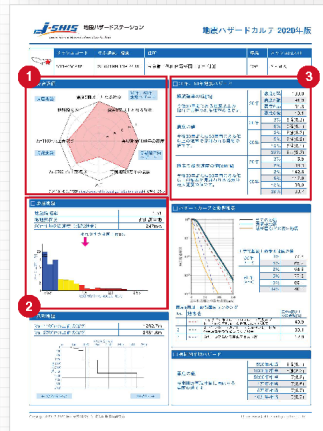
P6 【本編】 お住まいの地域を見てみよう

お住まいの地域の揺れやすさや
強い揺れに見舞われる可能性を調べてみよう

お住いの地域を調べる方法を記載



ハザードカルテを紹介。
特に見てほしい3か所に
絞って解説。



地震ハザードカルテも見てみよう

- 1 総合評価**
グラフの面積が大きいほど、地震被害を受ける可能性が高い場所であることが分かります。
- 2 表層地盤**
地震に見舞われたときのその土地の揺れやすさ(震度の大きくなりやすさ)を示しています。
ピンクの矢印は、全国の中だとこの土地はどのくらい揺れやすい土地なのかを示しているもので、この場合は、揺れやすさが全国の中で上位8%に入っている場所であることが分かります。
- 3 30年、50年地震ハザード**
過去の地震発生履歴などに基づいた、今後30年間や50年間に強い揺れに見舞われる確率などを示しています。

試作版の各ページの内容

P7 【知識】地震動についての基礎

「地震動」についての基礎知識を解説。

地震→地震動→被害の関係について記載

揺れ方についての基礎知識

これを正しく知っておいてほしいという意図で記載。

第三章 地震動を理解し、正しく備えよう

第四章 ご利用の際の注意点

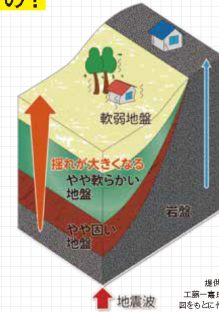
地震・地震動・被害についての基礎知識

Q.地震とは何か？地震動とは何か？何が違うの？

地震とは、地下の岩盤が急に壊れることで発生する自然現象です。
この際に発生する大きなエネルギーが地震波となり、地中を伝わっていきます。
地震動とは、この地震波が地表に到達し、地面が揺れることです。
つまり、私たちが実際に感じる「揺れ」が地震動です。

Q.地震動が起ると、必ず被害が起きるの？

いいえ。
地震動が起こるからといって、必ず被害が起きるわけではありません。
被害は、対策をすることで軽減することができます。
しかし、対策をするためには、どんな地震動が起こりえるのかを知る必要があります。



地震動を知って対策をすることで、被害を軽減できる

POINT

地震の揺れ方は、場所によって大きく変わる

これは、地盤の固さの違いなどが原因です。
例えば、多くの人が住む平野部は、一般的に地盤が柔らかく、揺れが増幅し大きく揺れやすいです。また、高層階では低層階よりも大きく揺れることがあります。さらに、建物の構造によっても揺れ方が異なります。自分の住んでいる場所が揺れやすいところなのかどうか、知っておくことが大切です。



試作版の各ページの内容

P8~9

【知識】地震のメカニズムや各種知識

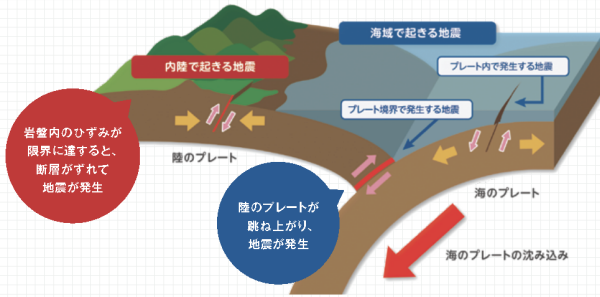
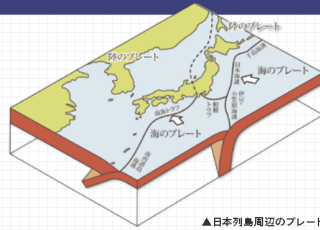
地震のメカニズムを簡単に説明

第一章 「地震動予測地図」の紹介 第二章 地震動予測地図を見てみよう

地震発生メカニズム

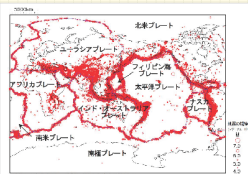
海域で起きる地震と陸で起きる地震

地震には大きく分けて海域で起きる地震と内陸で起きる地震があります。海域で起きる主な地震としては、プレート境界で起きる地震が、内陸で起きる主な地震としては活断層で起きる地震がありますが、活断層がない場所でも大きな地震が発生することもあるので、注意が必要です。



日本は世界有数の地震大国

日本周辺では、複数のプレートがぶつかり合い、複雑な力がかかっているため、世界有数の地震多発地帯となっています。右の図の赤丸は世界の地震の震源を示したのですが、日本付近は地震が非常に多く発生していることが分かります。観測データによると、全世界で発生する大きな地震の20%近くが日本とその周辺で発生しています。



苗字 名前氏



苗字 名前氏
所属団体
苗字 名前氏

日本では地震が多い理由 (専門家からのコメント)

第三章 地震動を理解し、正しく備えよう

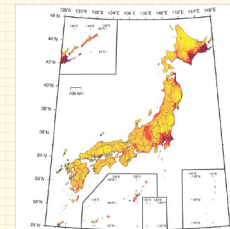
地震動予測地図についてのよくある質問を解説

強い揺れに見舞われる確率は、なぜ太平洋側の方が高いのか。

J-SHIS地震動予測地図では、現在、太平洋側の方が確率が高くなっています。これはどういう仕組みなのでしょう。

太平洋側の確率が高い理由

内陸の活断層で発生する地震の多くは、数千年~数万年間で発生している一方で、海溝型地震は発生頻度が高いものでは数十年間隔で発生しています。そのため、「30年以内」などと時間を区切ると海溝型地震の発生確率が高くなり、その地震の影響を受ける地域は、地震動予測地図の確率が高くなりやすいのです。



太平洋側の確率はいつでも高いのか

地震動予測地図と言うと、太平洋側の確率が高い地域が見られるかと思いますが、いつの時代も太平洋側の確率が高いわけではありません。左の図は、1950年の地震動予測地図*です。1950年時点では南海トラフ地震の発生確率が高くないことから、太平洋側は特に高い確率になっていません。その後、時間の経過とともに確率が高くなってきたのです。

*左図は石川ほか(2011)を引用。論文執筆時点の知見に基づいて過去にわたる地震動予測地図。

太平洋側が高い理由

太平洋側が高くないこともあるということを知りたくて記載

地震動予測地図では、なぜ強い揺れに見舞われる可能性を確率で表しているのか。

地震の発生というのは、本質的に不確実な現象です。

発生時期には幅があり、10年後かもしれないし、200年後になるかもしれません。

そういった、不確実な現象の予測を定量的に表すために確率の表現が必要となってくるのです。

また、地震動予測地図の確率値は「切迫度」を表しているわけではないということも重要です。地震動予測地図の確率値は、「不確実な現象について、ある日付時点の予測を定量的に表したものに」なります。

なお、上のコラムにもあるように、「平均的な幅」が小さい海溝型地震の方が、確率値が大きくなる傾向があります。



所属団体
苗字 名前氏

なぜ「確率」で示しているのか。(専門家からのコメント)

試作版の各ページの内容

P10 【利用者へ】活用場面の紹介

対象者別の活用場面例を紹介。

第一章 「地震動予測地図」の紹介

第二章 地震動予測地図を見てみよう

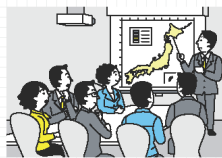
地震動予測地図は、例えば以下のような場面で活用できます。

■ 官庁・地方公共団体の防災のご担当者の方へ



防災計画の策定に活用

地域内における強い揺れに見舞われる確率の違いが相対的に分かるので、防災計画や、長期的な街づくり計画に活用することができます。



研修での活用

J-SHISには、地震動に関連する情報が基礎から専門的なことまで含めて、何でも載っています。異動が多い公務員において、防災研修などで活用できます。



住民への
防災意識啓発に活用

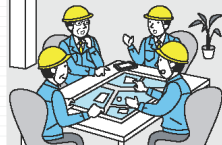
地盤の状況など、住民の興味が大いなる情報を中心に、地震・地震動に関して説明することで、住民に地震に対して「正しく恐れて」いただき、住民の地震対策の重要性の意識を高めることができます。

■ 民間企業の方へ



BCPの策定に活用

大地震発生時のBCP策定に当たっては、地盤の状況や、どのような揺れに見舞われる可能性があるのかを知っておくことが重要です。J-SHISはこのための基礎資料が多く掲載されています。



適切な耐震設計の実施

活部地盤・深部地盤の情報などとともに、地盤の揺れやすさを推定することができるので、建物に求められる耐震性能を客観的に評価し、適切な設計を行うことができます。

■ 個人の方へ



地盤の状況の確認

お住まいの場所の地盤の状況や、地震が発生したときの揺れやすさを確認することができます。ぜひ、地震を「正しく恐れ」、対策につなげましょう。

check | あわせてご活用ください

地震調査研究推進本部HPには、地震動予測地図の活用のより詳細な「手引き」を掲載しています。
https://www.jishin.go.jp/evaluation/seismic_hazard_map/


細かい機能はこのパンフレットでは紹介しきれないので、「手引き」で補足。

試作版の各ページの内容

P11【利用者へ】地震動予測地図に関するよくある誤解・誤用

地震動予測地図についてのよくある誤解・誤用を、正しい内容と共に記載。

第三章 地震動を理解し、正しく備えよう第四章 ご利用の際の注意点



地震動予測地図の誤解・誤用

このページでは、地震動予測地図についてのよくある誤解・誤用をまとめました。

<p>✕ 確率が高い地域が先に大きな揺れに見舞われる</p> <p>確率は、強い揺れに見舞われる順番を示したものではありません。確率が低い場所でも最初に強い揺れに見舞われる可能性があります。</p>	<p>✕ 確率が低い＝安全な地域である</p> <p>確率が低い地域は強い地震に見舞われないというわけではありません。ひとたび地震が起きれば、強い揺れに見舞われる可能性があります。一方で、仮に強い揺れに見舞われたとしても耐震化、家具の固定等の対策をしっかりと行うことで、被害を軽減することができます。</p>
<p>✕ 他の地域と比べて確率が低いから安心である</p> <p>地震動予測地図は、強い揺れに見舞われる可能性を科学的に求めた地図です。一度強い揺れに見舞われれば確率は関係ありませんので、自分の住んでいる地域にはどのような特徴があるのかを知り、それに対して備えることが重要です。</p>	<p>✕ 確率が高い地域の方が地震発生時に被害が大きくなる</p> <p>地震動予測地図の確率は、地震が起こった時の被害の大きさを示したのではなく、強い揺れに見舞われる可能性を確率で示したものです。強い揺れに見舞われたときの被害は、耐震化等の対策を行うことで、軽減することができます。</p>
<p>✕ 地震動予測地図は、地震の発生時期や規模を予測した地図である</p> <p>現在の科学的知見では、地震の短期予知(前兆を捉えて警告を出すこと)はできません。地震動予測地図は、過去の地震の発生履歴や地盤の固さのデータなどを基に、確率的に強い揺れに見舞われる可能性を示したものです。</p>	<p>✕ 地震動予測地図は個々の建物の被害の大きさを示した地図である</p> <p>地震動予測地図の確率はあくまでも、その場所が強い揺れに見舞われる確率を示したものであり、個々の建物の被害を予測した地図ではありません。耐震化、家具の固定等の対策をしっかりと行うことで、被害を軽減することができます。</p>

開発者からみなさまへ

コメント見出しが入ります。
コメント見出しが入ります。コメント見出しが入ります。

日本は、複数のプレートがぶつかり合っている場所に位置するため、世界でも有数の地震多発地域です。地殻変動が活発で、地震が起こりやすい構造になっているため、地震が多いです。(60文字)



所属団体
苗字 名前 氏

地震動予測地図をどのように使ってほしいのかを、製作者側からコメント。

試作版の各ページの内容

P12 【ウラ表紙】 今後の備えのためのリンク集

最終目的である「備え」を促すため、「今後の備えのために」という形で読者に呼びかける形でパンフレットを締める。

参考となるリンク集を掲載。地震・津波そのものと、防災に関する情報を分けて掲載。

今後の備えのために

日本に地震の揺れの備えが不要な地域はありません。そして、どう備えるかは、お住まいの地域の地盤の状況等、個人個人でも異なってきます。お住まいの地域の特徴などを踏まえ、どのような備えをすれば良いのかなど、これらのサイトを参考に取組んでみましょう。



地震・津波に関する情報

■ 防災科学技術研究所(NIED) J-SHIS 地震ハザードステーション <https://www.jshis.bosai.go.jp/>
地震動予測地図や地盤データの閲覧のほか、それらのGISデータのダウンロードも可能です。



■ 地震調査研究推進本部 <https://www.jishin.go.jp/>
最近発生した地震の科学的評価や、過去の地震発生履歴などに基づく地震活動の長期的な予測などの情報を提供しています。



■ 気象庁 <https://www.jma.go.jp/>
最新の地震情報や津波警報・注意報の発表状況、過去の地震データ、地震に関する総合的な情報が得られます。



■ 国土地理院 <https://www.gsi.go.jp/>
地震の際の地殻変動の様子のほか、活断層の位置の情報を示した活断層図など地震防災に役立つ地理空間情報を整備し提供しています。



防災に関する情報

■ 内閣府防災情報のページ <https://www.bousai.go.jp/>
南海トラフ地震が発生した場合の被害想定などの情報が掲載されています。



■ ハザードマップポータルサイト <https://disaportal.gsi.go.jp/>
洪水・土砂災害・高潮・津波のリスク情報、道路防災情報、土地の特徴・成り立ちなどを地図や写真に自由に重ねて表示できます。市町村が法令に基づき作成・公開したハザードマップへのリンクもそろっています。



■ 総務省消防庁 <https://www.fdma.go.jp/>
地震発生時の行動マニュアルや地震による被害の状況などの情報を提供しています。



■ 各地方公共団体ホームページ
各地方公共団体のホームページでは、地域のハザードマップや避難所・避難場所などを詳しく紹介しています。

文部科学省 研究開発局 地震火山防災研究課
(地震調査研究推進本部事務局)

〒100-8959 東京都千代田区霞が関3-2-2
電話 03-5253-4111(代表)

地震本部 検索
<https://www.jishin.go.jp/>

地震に勝らない国にする
地震本部
政府 地震調査研究推進本部
The Headquarters for Earthquake Research Promotion